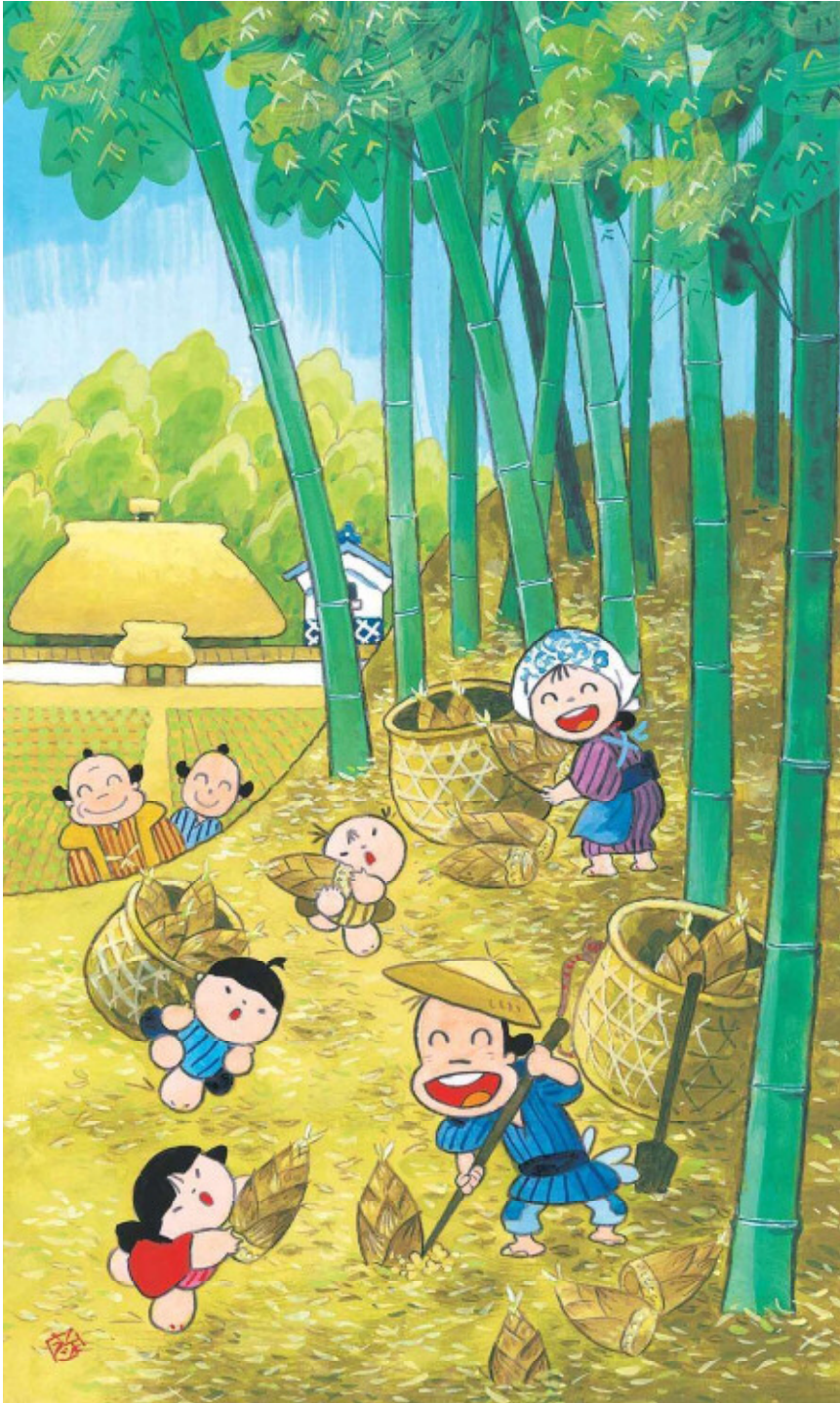


「広報しながわ」平成 19（2007）年 4 月 1 日号より転載
 （イラスト：池原昭治）



むかし 戸越
 しながわ 品川
 昔ばなし

治郎兵衛とたけのこ

い まから、二百年ほど前の江戸時代・安永年間（1772～81年）のことです。京橋というところで大きな廻船問屋（荷主と船主の間にたって、積み荷の取り扱いをする商売）をしていた山路治郎兵衛さんが、戸越村に家を建てて、引っ越してきました。

そのころ、このあたりの農民は、水が足りないやせた畑で青菜や大根などを作っていましたが、収穫は少なく、高い年貢に苦しめられ、貧しい暮らしを送っていました。

「なにか、この土地が豊かになれるものは、ないものだろうか」などと考えながら、治郎兵衛さんが、芝にある薩摩藩*の江戸のお屋敷近くを歩いていたとき、お屋敷に生えている、幹が太く青々として背の高いみごとな竹に目がとまりました。

「この竹のたけのこなら戸越村の名物になるぞ!」。治郎兵衛さんはさっそく、お屋敷の門をたたき、「竹をすこし分けてはもらえませんか」とたのみましたが、ぜんぜん相手にしてもらえませんでした。

江戸時代、太い青竹は清（現在の中国）から琉球（現在の沖縄県）に伝わっていましたが、日本ではまだ珍しく貴重なもので、薩摩藩の殿様が鹿児島のお屋敷から、江戸のお屋敷に持ってきて植えていたものでした。

断わられた治郎兵衛さんは、どうしてもあきらめきれません。そこで、江戸のお屋敷に出入りする庭師さんにたのんで、弟子にしてもらいました。それから一年後、治郎兵衛さんは、やっとのことで竹を手に入れ自分の家の庭で栽培することができました。

大きくて味の良いたけのこができるようになると農民に株分けしてあげました。戸越村あたりの農家はこぞってたけのこづくりに精を出し、江戸市中に売りにいきました。たけのこづくりは戸越・中延・小山・上下蛇窪の村から目黒まで広がって、このあたりの名物となり、大正時代までさかんに栽培されました。

*鹿児島藩のこと。薩摩藩は通称で、藩主は島津家。

小山1丁目の住宅街のかたすみなたけのこの形をした高さ1.25メートルほどの石の碑があります。たけのこを戸越村周辺（現在の戸越、小山、中延あたり）に広めた山路治郎兵衛の子、三郎兵衛が建てた孟宗筍栽培記念碑です。碑には、治郎兵衛の辞世の句（この世に別れを告げる際に残す歌）が刻まれています。

櫛も栞も、弥陀にまかせて 雪見哉 釈竹翁